ほんばこ

愛媛県立今治西高等学校図書委員会　2023

例年に比べ、暑い日が続きますがいかがお過ごしでしょうか。じめじめとした日も多いので外に出られない日もありますよね。今日は、そんな日に読みたくなるような本をご紹介します。

6月(水無月(みなづき)・風待月(かぜまちづき)・葵月(あおいづき))

＊＊二十四節気＊＊

芒種(ぼうしゅ)　6日

稲や麦など穂の出る植物の種を蒔く頃です。稲の穂先にある針のような突起を芒(のぎ)といいます。

夏至(げし)　21日

一年で最も日が長く、夜が短い日です。これから夏の盛りへと、暑さが日に日に増していきます。

図書委員よりお勧めの本

『君の膵臓を食べたい』　住野よる　著

この本は、「僕」が病院で偶然見つけた「共病文庫」を手にとったことがきっかけで、膵臓の病気を患った山内桜良と出会い、彼女の余命を一緒に過ごしていくという物語です。友達と毎日楽しく笑い合い、時にはケンカをしてしまうこともあると思います。そのような友人と過ごす日々を大切にしようと思うことができ、また生きるとはどういうことなのか考えさせられます。物語のラストは感動するので気になった方はぜひ読んでみてください。

（3年生　女子）

小論文に役立つ本

小論文を書くときの参考にコーナーを設けています。ZEST で利用する人もいます。3年生だけでなく、1・2年生も、普段から興味のあるテーマについて読んでみることをお勧めします。なお、**禁帯出**になっている本は、図書室内での使用になります。協力をお願いします。

◎『現代用語の基礎知識　2023』（自由国民社）

現代社会を読み解くキーワードについて解説されているので、最新の情報・知識を得るのに便利です。ある分野についてまとまった知識を持つのに役立ちます。また、年度版で出されており、事柄によっては過去の版の方が詳しい場合があります。

◎『2023年の論点　100』（文藝春秋）

この年度に問題になった事柄について、分野ごとに識者が論じた文章が掲げられています。断片的な知識を得るのではなく、自分の論を形成するために、また、論文の書き方を学ぶために適しています。

＊図書委員会読書会のお知らせ：７月１４日（金）放課後、図書館にて。テーマ：『伊勢物語』。関心のある人は図書館で聞いてみてください。

薦めてみる本　ユルスナール『とどめの一撃』岩波文庫　　フランス文学

１　作者マルグリット・ユルスナール Marguerite Yourcenar 1903~1987：フランスの作家（女性）。本名 Marguerite de Crayencour。ブリュッセル生れ。父はフランス貴族の末裔。生後すぐ母を失う。幼時から仏、英、ギリシア、中近東などの滞在。ラテン語、ギリシア語を学び、古典的教養を身につけた。16 才で処女詩集を自費出版。1929 年『アレクシあるいは空しい戦いについて』で文壇に登場。1939 年『とどめの一撃』。1939 年以降しばらくアメリカ在住。1951 年帰仏、『ハドリアヌス帝の回想』、1968 年『黒の過程』（フィミナ賞）など。1971 年レジオン・ドヌール勲章。1980 年女性として初めてアカデミー・フランセーズ会員に推挙さる。1981 年『三島あるいは空虚のヴィジョン』（三島由紀夫について）。1982 年日本にも滞在したことがある。（集英社世界文学事典ほかを参照した。）

2　『とどめの一撃』“Le Coup de Grace”　岩崎力・訳　岩波文庫 1995 年

1939 年、第２次大戦勃発の直前に発表。背景はロシア革命の動乱を背景としており、舞台はバルト海沿岸の片田舎クラトヴィツエを主な舞台とする。ロシア革命で赤軍が現われ、他方反革命（反ボルシェヴィキ）の闘争も現われ、過酷な内戦となる。ロシア人、ラトヴィア人、ドイツ人らが入り交じる。その中にエリックとソフィアの悲劇的な恋（？）が展開する。それら全てが終わった後、十五年の歳月を経て、語り手は過去を回想して語る。作者自身による序文が 1962 年 3 月 30 日の日付でついている。こう読んでほしい、誤読しないでほしいということだろう。

岩波文庫解説の岩崎力によれば、ユルスナールはアンドレ・フレニョーという恋人（かなえられなれず抹消された恋の相手）がいたと言われている。但し安易に伝記的事実を持ち込んで作品を矮小化して理解した気になることは慎まなければならない。

登場人物を少し挙げてみよう。以下ややネタバレを含む。

・エリック：語り手。バルト系とフランス系の混じったプロシア人。落ちぶれた貴族の子孫。父親はフランスに親近感を抱いていたにもかかわらず、フランス軍に撃たれて死亡。エリックはボルシェヴィキに対しては階級的敵意を抱いており、反ボルシェヴィキ闘争のフォン・ヴィルツ男爵の志願兵部隊に参加する。コンラートという親友がいる。その姉・ソフィアと恋（？）の葛藤をするに至る。

・コンラート：エリックの親友。ロシアの血の混じったバルト人。貴族の末裔。病弱。父親はドイツの収容所で死亡。

・ソフィア（ソーニャ）：コンラートの姉。エリックと同年。貴族の娘。その邸は反革命軍の兵士たちのたまり場になる。エリックと恋（？）に落ちるが・・・？

・グリゴリ・レーヴ：本屋のセールスマン。小柄なユダヤ人。ソフィーと親交があったが、今は赤軍中尉。

・ミシェル：ソフィーの邸の庭師。

・フランツ・フォン・アーラント：若い兵士。

・ショパン：軍曹。良識の持ち主。

・フォルクマール：同僚でライバル。野心家で利害にさとく、エリックにとって不愉快な男。

３　コメント：最後まで読むと、『とどめの一撃』という題名の意味が分かる。ずしんと重い一撃だった。

（フランス文学）ラブレー、モンテーニュ、モリエール、ユゴー、スタンダール、バルザック、フローベール、ゾラ、ボードレール、ランボー、ヴェルレーヌ、マラルメ、カミュ、サルトル、マルロー、テグジュペリ、ベケット、イヨネスコ、プルースト、ジッド、サガンなどなど多くの作家・詩人がいる。中江兆民、永井荷風、萩原朔太郎、堀口大学、島崎藤村、与謝野晶子、高村光太郎、小林秀雄、横光利一、岡本かの子・太郎、遠藤周作、渡辺一夫、大江健三郎、内田樹らもフランスの文学・思想に学び多くを得た。(安井)